

同じ病名でも、一人ひとり違う症状

田中律子先生(大阪/湯里住吉教室)

田中先生は、通常の教室日以外に週2日、月・木曜に、4人の“障害児”を指導しておられる。その4人の子供たちの病名はつぎのとおり。

U子ちゃん = 小5 ダウン症、てんかん、上顎異形、IQ = 27

K君 = 小5 ダウン症、自閉的傾向、IQ = 30

M子ちゃん = 小5 ダウン症、サリドマイドによる指の異形、IQ = 30

I君 = 小5 自閉症、IQ = 50

プロローグ

以上の病名はそれぞれ、医師および相談員からの診断。現在、全員地元の小学校の養護学級に通っている。この子たちと田中先生の出合いは、53年の6月のことだった。もともと、先生と知り合いだったU子ちゃんのお母さんが、あるとき先生に相談をもちかけてきた。

「U子が20歳になるまでに、何とか、買い物ぐらいはできるようにしてやりたいのです。今までにも家庭教師を頼んだりしてみたのですが、

U子のほうが、それらの先生を受けつけません。公文式で何とかならないでしょうか」

ということだった。田中先生はそれまでに、肢体不自由児を4人指導してきた経験はあったが、ダウン症、自閉症児は初めてだった。

「私に、なついてくれさえすれば、なんとかやれるだろうと思い、とにかく子供と会ってみました。U子ちゃんは会うなり、いきなり訴えるのです。

『せんせ、さんすうむずかしい。キライ!』と。それが、不自由な発音ながら、本当に実感がこめられているんですね。ずいぶん算数でつらい思いをしてきたのでしょう。胸が熱くなり、『先生も、むずかしい算数大キライよ。楽しいお遊びでやろうね。一緒にやろう!』と思わず叫びました。そして、一時間ほどU子ちゃんと面接をして、帰りがけにむこうから握手を求めて来たのです。

そのとき『これならできる』と、確信しました。」

“積木”と“漢字カード”で興味を

その後、U子ちゃんのお母さんの紹介で、7月にK君、9月にM子ちゃん、11月にI君が入会。指導形式は一对一である。月に2回ほどは他の人との協調性を養うため、4人合同での指導を試みているが、

まだ、やはり気が散るそうである。

「まず、どうやって私の身近な場所に座らせるか、ということから始めなければなりませんでした。“多動性”というのでしょうか、なにしろじっとしていないのです。この対策には“かず遊び”と“漢字カード”を使いました。あの子たちがチョコ、チョコ動き回っていても、私ひとりで積木やカードをやっているのです。すると、やがてそれらに興味をもって、近寄ってきます。そこを巻き込んで一緒にやるようにしました」

同じダウン症といっても、一人ひとり違う。積木やカードだけで2か月を費した子もいれば1回めの学習からプリントに入れた子もいたそうである。

以下、4人のうち、もっとも症状が重いU子ちゃんの学習経過を追ってみる。

U子ちゃんの場合

入会時の状態 = 1~20 まで、数唱も不確か。

〔昭和54年6月~8月〕

AA1 を見せてもまるで興味を示さない。積木の1~9をとり出し、数唱しながら箱の蓋の上に載せる遊びを繰り返す。また、「数字」、「指の絵」、「」の積木をセットにする遊びをやる。指は比較的早く理解するが、「」で少し戸惑う。

積木と同時に漢字カードを使う。「胡瓜」「傘」「葡萄」など、身近なものから驚くほど早く覚える。


10月からは、大判カードを使用したが、従来のものより、さらに興味を示す。2週間後に20枚全部を覚える。


積木、カードは家庭でも毎日やらせる。

〔9月初旬〕

指導を始めてから2か月目。初めてAA1aの左側だけさせてみる。点線をなぞるのが苦痛のようだ。点線からはみ出すと神経質に消して直す。1回の学習平均3枚。(0枚のこともある)

〔10月〕

AA1 の数が数えられるようになった。しかし  は2と書けるが

 がわからない。指の力が極端に弱い。鉛筆をすぐ落とす。4B の鉛筆に紙を巻いて太くしてやる。とても数字が安定してきた。

Ⓐ教材を与えてみるが、点線をなぞるのが苦手なU子ちゃんには苦痛らしい。AA教材に戻す。

〔11月〕

物を5つまで数えられるようになる。そのことを知った学校の先生が

2+3、1+4 など、“たして 5”までの問題をやらせたために大混乱。積木、漢字カードは相変わらずお気に入り、毎日、朝夕に一人で出してやっている。

普通の鉛筆が握れるようになる。

〔12月〕

AA11に入れてみる。1と2の区別はスラスラできるが、3と4を時々混同する。

〔1月〕

1月末までに AA 教材を約 200 枚学習、そのときの進度、AA16。

どうせ、できないという先入観に怒り

「4 人だけに関しても、症状は違うし、学習に対する興味もまるで違います。ひとつの事例だけで、公文式はダウン症児に効果的なんだと結論は下せません。また、他の子の事例どおり指導しても、うまくいくとは限りません。でも、効果がどうのこうのは、学者にまかせておけばいいと思います。効果がはっきりしないから何もしないというのは、あまりにもその子たちがかわいそうです。

理論がどうあれ、物が数えられなかった子が、現実に数えられるようになり、数字が書けるようになっているのです。私たちに、ダウン症

という病気が治せるわけではありません。できる可能性のあることを、一つでも、二つでも実際にできるようにしてやることだと思います。例えば、覚えられる漢字をなぜ今まで覚えさせなかったのか、本当に腹が立ちます」

田中先生は、学校の養護学級の授業を、自分の指導の参考にと、見学に行ったそうである。

「私の見学させていただいたのは、たまたま、ひどい授業でした。算数の時間でしたが、先生が黒板に、 $4+3=$ と書いて、一人の生徒に当てます。生徒が答えられないと、生徒の手を持って、『4 と 3 が合体するといくつ？ 7でしょ！ わかったね』少し極端な表現ですが、大体、この様です。

これじゃ、普通の生徒にだって苦痛です。もちろん、養護学級の先生みんながこの様ではないでしょうが、世間一般でも、『どうせ、できないだろう』という先入観は、かなり根強いようです。

“障害”を持った子に接してみますと、普通の子の気持まで読めるようになるのです。生意気な言い方ですが、“障害児”教育は教育の原点という感じです。より繊細な神経にふれて、見過ごしがちの子供の気持に気づきます」